

大学生の友人関係における心理的距離のとり方¹⁾

近藤 賢（教育学研究科教職実践専攻）

山下 翼（教育学研究科教職実践専攻）

舩元崇史（教育学研究科教職実践専攻）

宮崎理紗（教育学研究科教職実践専攻）

川井田大輔（教育学研究科教職実践専攻）

谷口弘一（教育学部人間発達講座）

問題と目的

近年、子どもや若者が何か社会問題をおこすたびに、その一因は人間関係の希薄化にあるといわれる。例えば、約 20 年前に神戸でおきた児童殺傷事件、いわゆる「酒鬼薔薇」事件の際には、次のような論説記事が掲載された。“つかまった中学三年生の少年は、いつも孤独だった。彼は...心を許せる友だちがいなかったという。...確かなことは、パソコンや電子ゲームなどに囲まれた情報社会が濃密になるほど、人間関係の希薄化が進んだことだ（朝日新聞, 1997）。”

この傾向は現代青年にもみられ、現代青年の友人関係は希薄化しているといわれている。希薄化とは、人との深いつながりをもとうとしなかったり、もとうとしてもそれが得られにくい傾向をいう。松井（1990）は、最近の青少年の中には、友人との全人格的な完全な融合を避けて、距離を保ち、一面的で部分的な関係にとどめようとする疎隔的、部分的な志向性が表れていると述べている。また、千石（1991）の調査によると、現代青年は相手と距離を置いた範囲でしか自分を打ち明けていない傾向があることが示されている。さらに、岡田（2002）によれば、現代青年は、友人関係で自分の内面を開示するような関わり方を回避し、表面的な楽しさのなかで群れたり、お互いの内面に踏み込まないようにと気を使う傾向があるとしている。

青年期の友人関係において、心理的距離をめぐる問題が大きく位置づけられ、社会心理学・青年心理学の分野では、青年期の友人関係における心理的距離の問題について探求する研究がなされるようになってきた。心理的距離とは、親密度や依存度などによって規定され、自己が他者との間に認知する心理的な距離をさす。

1) 本論文は、教育学研究科教職実践専攻の必修科目「児童・生徒の理解と指導Ⅰ」（担当：谷口弘一）において、受講生が3つの少人数グループに分かれ、グループごとに行った調査研究の結果をまとめたものである。

藤井（2001）は、友人との心理的距離をめぐって生じる葛藤や問題の解決への糸口として、大学生の友人関係における心理的距離のとり方の全体像を探り、大学生の友人関係における心理的距離のとり方を明らかにした。その結果として、「表面的関係から踏み出せない距離のとり方」、「密着しようとする距離のとり方」、「互いの領域を守る距離のとり方」、「相手主体で同調する距離のとり方」、「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」、「互いを支配しようとする距離のとり方」の6種類の特徴があることが明らかになった。

藤井（2001）の調査では、調査対象者を国立大学1～4年生123名とし、大学生全体の友人関係における心理的距離のとり方が明らかとなっている。しかし、大学生の学年間と男女間の差は明らかとなっていない。そこで本研究では、大学生の友人関係における心理的距離のとり方の学年間と男女間の差を明らかにすることを目的とする。

方法

参加者と手続き

長崎大学教育学部生1年生221名（男性59名、女性162名、平均年齢18.38歳、 $SD=.56$ ）、2年生94名（男性28名、女性66名、平均年齢19.45歳、 $SD=.56$ ）、3年生134名（男性39名、女性95名、平均年齢20.37歳、 $SD=.50$ ）、4年生96名（男性29名、女性67名、平均年齢21.72歳、 $SD=1.25$ ）が調査に参加した。2013年7月の5回の講義に渡り、開始10分程度を利用して調査を実施した。実施に先立ち、データは厳重に管理されること、回答内容は授業の評価とまったく関係ないことが参加者に伝えられた。

質問紙調査の内容

調査は各人が特定できないように無記名で行われた。フェイスシートでは、性別、年齢、学年を尋ねた。質問紙に含まれていた尺度は以下の通りである。

重要な友人との心理的距離のとり方 藤井（2001）が作成した心理的距離のとり方を測定する尺度（6因子）から、因子負荷量を考慮し、各因子5項目ずつ合計30項目を選択して用いた。本尺度の因子は、(1) 表面的関係から踏み出せない距離のとり方、(2) 密着しようとする距離のとり方、(3) 互いの領域を守る距離のとり方、(4) 相手主体で同調する距離のとり方、(5) 互いを尊重する柔軟な距離のとり方、(6) 互いを支配しようとする距離のとり方の6つである。藤井（2001）によって、本尺度の内容的・因子的妥当性が確認されている。回答者は、各質問項目の内容がどれくらい自分に当てはまるかについて、「とてもあてはまる（4点）」、「どちらかといえばあてはまる（3点）」、「あまりあてはまらない（2点）」、

「まったくあてはまらない（1点）」の4件法で回答した。

結果

心理的距離のとり方の特徴

Table 1 に心理的距離のとり方の平均値と標準偏差を示す。性別、学年を個人間要因、心理的距離のとり方を個人内要因とした 3 要因分散分析を行った結果、心理的距離のとり方の主効果ならびに性別と心理的距離のとり方の交互作用が有意であった ($F(5,2685)=298.81, p<.01$; $F(5,2685)=6.16, p<.01$)。下位検定の結果、「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」の得点が最も高く、次いで、「相手主体で同調する距離のとり方」と「互いの領域を守る距離のとり方」の得点が高いことが示された。また、「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」の得点は、女子が男子よりも高いことが確認された。

Table 1 心理的距離のとり方の平均値と標準偏差

性別	学年	表面的関係	密着	領域守護	同調	相互尊重	支配
男性	1	2.03 (.60)	2.01 (.63)	2.18 (.57)	2.27 (.44)	2.89 (.43)	1.93 (.51)
	2	2.09 (.50)	2.19 (.53)	2.30 (.54)	2.34 (.40)	2.96 (.43)	2.07 (.45)
	3	2.17 (.69)	1.97 (.76)	2.27 (.70)	2.14 (.57)	2.80 (.53)	1.97 (.65)
	4	2.17 (.50)	1.95 (.46)	2.28 (.39)	2.19 (.37)	2.83 (.42)	2.00 (.37)
女性	1	1.91 (.51)	2.03 (.54)	2.15 (.47)	2.22 (.44)	3.10 (.39)	1.92 (.48)
	2	2.10 (.52)	2.13 (.55)	2.26 (.43)	2.31 (.38)	3.02 (.36)	2.12 (.42)
	3	2.08 (.67)	2.10 (.53)	2.20 (.50)	2.26 (.41)	3.09 (.39)	2.04 (.49)
	4	2.08 (.60)	2.00 (.54)	2.17 (.58)	2.24 (.49)	3.13 (.33)	1.96 (.50)

Note: $n=59$ (男性1年), 28(男性2年), 39(男性3年), 29(男性4年), 162(女性1年), 66(女性2年), 95(女性3年), 67(女性4年).

考察

6 つの心理的距離のとり方のうち、大学生では「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」が多く見られた。これは藤井（2001）と一致する結果である。現代大学生において、近づいたり遠ざかったりを柔軟に繰り返す距離のとり方を行う傾向があると考えられる。

「密着しようとする距離のとり方」や「お互いを支配しようとする距離のとり方」にみられる密着型、支配型ともいえる心理的距離のとり方は、大学生ではあまりみられなかったことも藤井（2001）と一致する結果である。「表面的関係から踏み出せない距離のとり方」については、藤井（2001）の研究では、「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」に次いで得点が高かったが、本研究においては、「密着しようとする距離のとり方」や「お互いを支配しようとする距離のとり方」と並び得点が低かった。落合・佐藤（1996）によると、大学生では、友達と本音を出し、心をうちあけて話ができ、互いにわかりあえるようなつきあいをしよう

とする。本調査の参加者は、友人とそうしたつきあい方をすることによって、表面的ではなく、比較的親密な関係を構築していることが示唆される。

男女間の差をみると、「互いを尊重する柔軟な距離のとり方」において、女性の得点が男性よりも高かった。こうした結果は、女性のほうが周りの状況を読む技術が高く、周りの友人により気を使いながら生活しているという牧野（2012）の指摘と一致するものである。

本研究では、教育学部 1～4 年生を対象にして、友人関係における心理的距離のとり方について横断的調査を行った。今後の研究では、小・中・高・大学生を対象にして、心理的距離のとり方の発達的变化について、より詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

朝日新聞 (2004). 6 月 30 日大阪版朝刊

藤井恭子 (2001). 大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要, 6, 69-78.

牧野幸志 (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係—同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差, 学年差の検討— 経営情報研究, 20, 17-32.

松井 豊 (1990). 友人関係の機能 川島書店

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.

岡田 努 (2002). 現代大学生『ふれ合い恐怖心性』と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 10, 69-84.

千石 保 (1991). 『まじめ』の崩壊：平成日本の若者たち サイマル出版会